

## 書評 新刊 紹介



新日本海藻誌

吉田忠生 著 内田老鶴圃刊

25+1,222 ページ

定価 46,000 円+税 1998

「新日本海藻誌」がついに出版された。北海道大学名誉教授吉田忠生博士の労作で、序、凡例、本文（緑藻綱、褐藻綱、紅藻綱）、引用文献、学名索引、和名索引を合わせ、総ページ 1,247 の大著である。

岡村金太郎先生の日本海藻誌は 1936 年に出版以来、日本の海藻を研究する人々の座右の書として広く使われてきたが、刊行後の 60 有余年の間に、新種や日本新産の種、学名に変更のあった種、あるいは分類上の所属が変わった種などが多数記録されたため、最近はかなりの知識と資料を持ち合わせている者でないといふ状態になっていた。幸い、著者の吉田忠生博士は「岡村：海藻誌」以後に新たに加わった海藻や学名の変わった海藻などの全てを含めた海藻のリストを共同研究者らと作成し、1985 年以來、5 年毎に改訂版を本誌に発表して下さったので、私たちはさしたる予備知識や資料がなくても「岡村：海藻誌」を使い続けることが可能であった。しかし、新種の海藻がどのような特徴をもつのか、どのような理由で学名が変わったのか、分類上の所属が変わっているのはなぜか、等々を知ろうとすれば、それぞれ原論文に当たらなければならない。それには多大の時間と労力が必要である。「岡村：海藻誌」の増補改訂版ともいべき新しい日本海藻誌の刊行は誰もが待ち望むことであった。

著者の吉田博士は北海道大学に籍を置かれてより「新日本海藻誌」の作成を計画されたという。良く知られているように、北海道大学は創立以來海藻を専門とする学者が歴代の教授に多く、この方々が門下生と共に収集した海藻標本や資料は膨大な量に上り、また関係図書も豊富に揃っている。「新日本海藻誌」作成の場としてこれ以上の恵まれた環境はないといえる。吉田博士は日本産海藻の一種一種について文献を精査し、カードに必要事項、種の特徴、分布などを丹念に書き込む作業を続けられた。後にこの作業にはパソコンが用いられるようになったが、いずれにしても大変な努力であったことは想像に難くない。なお、このカード作りは全世界の海藻に関

する情報整理にも応用された。吉田博士が北海道大学に移られたのが 1968 年とのことであるので大著が私たちの目前に現れるまでに実に 30 年の歳月を要したことになる。「新日本海藻誌」の刊行は日本の藻学界にとっての快挙である。吉田博士の永年の労苦を多とし、「新日本海藻誌」の刊行を心から喜びたい。

本書は序文に始まり、学名に関する国際植物学命名規約を解説した凡例が続く。次の本文で緑藻綱 230 種、褐藻綱 308 種、紅藻綱 838 種の合計約 1,375 種が解説される。各綱では、綱の解説、目の検索；目の解説、科の検索；科の解説、属の検索；属の解説、種の検索、そして種の解説へと続く。綱、目、科、属には命名者名、記載年、記載文のページが記され、また目にはタイプの科名、科にはタイプの属名、属にはタイプの種名がそれぞれ記される。属名についてはどのような意味をもつかが解説される。種の記述は本書の根幹をなす部分で、種名、著者名、記載年、記載ページ、和名、シノニム（異名）と続き、さらにその種を引用した主な文献が挙げられ、また適宜解説図が挿入される。種の特徴の記述は最も行数を費やしている。そのあとにタイプ産地、タイプ標本の保存場所、地理的分布と続く。種により垂直分布の様子が記されるものもある。分類上の問題が特記されている種もある。引用文献は 67 ページに及び、1997 年までのものが網羅されている。

「日本産海藻類総覧」の副題からもわかるように、「新日本海藻誌」は日本産海藻の全ての種をまとめた同定用の書であると同時に日本の海藻の全貌を知る書でもあるので、海藻を調査研究をする人には不可欠の本である。海藻研究者の座右の書となるものであり、また広く大学や海藻に関わる調査・研究機関の図書館等に必備の本でもある。

もし本に対して注文をさせていただくなら、それは図についてである。印刷事情のゆえかと思われるが、図、特に標本写真の図が全体に小さい傾向にある。同定が主目的の本であるので、種の特徴がわかりやすいように大きくするか、特徴がでるように一部拡大などの工夫があると一層良かったと思う。もうひとつは形態用語の図解である。海藻の体構造や生殖器官には独特の用語が多く、文章だけでは専門家でも理解し難いものがある。残念なことに、海藻の形態・分類用語をわかりやすく解説した本はほとんどなく、あっても入手しにくい。事情が許すのであれば、後日、図を伴った用語解説の別冊の出版も考えられよう。一歩進めて、海藻の教科書であればなお望ましい。「新日本海藻誌」に親しみを持つ読者が増えることはまず間違いのないと思う。

千原光雄（千葉県立中央博物館）